タキシラ佛寺の伽藍構成

桑山正進

はじめに
石積法六種—第Ⅰ期塔東僧西—第Ⅱ期方形僧坊出現—第Ⅲ期四面僧坊確立—
第Ⅳ期造寺停滯—第Ⅴ期舊寺改修—第Ⅵ期十字形佛塔
塔院遷移—僧坊遷移—伽藍配置五式
おわりに　卷末圖表

はじめに

前稿でハッダ最近の發掘成果について寸評を試みたとき(『東方學報』京都第四五册、三三五頁—三五七頁)、ハッダにおける佛塔*の編年基準をどこに求めるかがきわめて困難であることにふれた。この事情はひとりハッダだけにとどまる問題ではなく、ガンダーラ地方(ペシャーワル盆地)にも當てはまることである。それは、ガンダーラ美術の編年研究が、やはりその基準のとりかたの曖昧さから、泥沼化している事態と表裏一體の關係にある。既に報告したとおり(『人文』九號、七頁)、ガンダーラ美術編年のためには、その方法をひとまず轉換してみることが必要な段階にきている。ガンダーラ美術がガンダーラという風土ときりはなすことができないで成立していったものであると認めれば、ガンダーラという地域の性格をガンダーラ美術の背景のひとつとして明確にし、そこから當美術を再檢討してゆくのもひとつの方法である。

また、集落遺跡を層位的に發掘し、土器様式をくみたて、それによってその地方の編年をおこない、佛寺出土の土器と對比

してゆく方法も既に注意を促したところであり(『東方學報』同上册、『西南アジア研究』一六號)、これも背景のひとつからアプローチする方法である。しかしここではこれらとは別の方法を提示し、編年の方向を模索したい。

ガンダーラの彫像が佛塔の莊嚴として佛塔と不卽不離なつながりのうえにある以上、造像活動の展開も佛塔をふくめた佛寺の展開過程と緊密な關係にあることは言うまでもない。ところがガンダーラ地方(ペシャーワル盆地)では多數の佛寺遺跡が存在するのにもかかわらず、佛寺の編年も確立しないまま、佛教彫像の編年がすすめられたのである。だがガンダーラ地方の佛寺編年もまた、その基準を容易にとらえがたい狀況なのである。

そこでガンダーラ地方と隣接し、かつ數の上でもガンダーラ地方と匹敵するタキシラ地方の佛寺がどのような變遷をたどったかを觀察することは、ガンダーラ地方の佛寺の編年に何らかの指針を與えるのではないか。しかもタキシラではJ＝マーシャルの二〇年(一九一三年～一九三四年)に及ぶ調査の結果、時代とともに變化した六種の石積法が確認されている。この石積法の變化や種類をそのまま他地域に適用することは危險であるが、タキシラ内に關するかぎり、佛寺の伽藍構成の變化をとらえうるほとんど唯一の手がかりである。したがってこの石積法に基くならば、各佛寺の創建時のプランから時代とともに增廣されたプランまでを檢討することができよう。そのような編年表を作製することによって、その中にガンダーラ地方の佛寺の占める位置を見出そうとするのである。卷末圖表はその意味で本論の集約である。**

タキシラにおける佛寺の伽藍配置について、マーシャルはとくにふれていない。近年、H＝サルカル Sarkar や高田修氏がふれることがあったが、いずれも概觀の域を出ず、D. H. Barua にいたってはとりあげるほどでもない。タキシラにおける佛寺の伽藍構成の展開を把握しておくことは、ガンダーラ彫像編年のためのまわりくどい一方法としての意味はもちろんのこと、タ―リム盆地へ至る道すじにある佛寺の伽藍構成やおそらくは東アジアにおける佛寺の伽藍構成を理解するためにも、根本的なことにちがいない。

本論では伽藍構成を塔地と僧衆の住處である僧地との配置と考え、時期別に考察したあとで、塔地や僧地の變遷を個別にあ

とづけ、配置法のかたにあるていどのきまりをみようとするものである。各寺院細部の記錄や建物に關する記述はみなマーシャルの調査報告に絶對に從い、煩雜になることを避けて筆者の記述の證據となる出典をあえて記さない。それは、マーシャルの發掘報告書の各寺院に關する記述を參照することが、この種の研究者にとって必須かつ容易な作業と考えたからである。

＊本論で使う「佛塔」とは、ストゥーパのことである。塔、小塔、大塔、主塔もみなこの意味である。大塔または主塔とは塔院の中心にあって、他を壓して規模の大きいもの、奉獻小塔に對していうなら主塔である。またグリハ＝ストゥーパ grha-stūpa とは、屋外に建立されたストゥーパではなく、堂宇内に本尊として祀られたストゥーパである。

＊＊卷末圖表について

表の左端に記したローマ數字は、石積法の時期を表わし、Ⅰから下へ順に時期の降ることを示す。左から右へ配列した伽藍構成のプランは、ほぼその形式順に從っているが、スペースの都合で必ずしもそうでない場合がある。各時期の欄にみえる各寺院は創建の場合と增廣の場合とがある。創建のプランあるいはまったくあらたなプランで改修された場合には、すべて寺院名を附した。したがって寺院名の附してないプランは前代から存續して增廣がおこなわれた場合に限る。この場合は各寺院をほぼ中心線上にのせてある。各寺院プランないし同寺異時期プランを結ぶ線はとくに關係のある寺院プランの系統を示した。たとえば、第Ⅱ期のギリC＝D＝E寺、カーラワーン、チル＝トープD1寺の系統が第Ⅳ期のジャウリアーンにつながることを示し、第Ⅱ期のギリC＝D＝E寺とカーラワーンは、第Ⅲ期のギリC＝D＝E寺へつながり、第Ⅳ期のジャウリアーンに系統づけられることを示す。また增廣がなく、創建當初のままのプランの寺院、チル＝トープA、C、D1、D2などは存續期間をおさえられないので、創建の時期にのみプランを示さざるをえなかった。存續期間に關しては本文にのべた場合もある。

石積法六種

時期別に伽藍配置を考察するため、時期を設定する作業が必要である。時期はタキシラにおける石積法の差異によって決定される。タキシラには六種の石積法があったことをマーシャルが示した。とくに第三都市における層位の確認とそれに對應する石積法の變化や建物の壁の入りくみかたによる石積法の前後關係（時期差）によって、六種の石積法がほぼ六時期に呼應し、しかもそれらは斷絶なく時間的に前後の順を追って現われたことがしられる。この六種の石積法の前後關係をそのままガンダーラやスワート等々の地方で適用することは上述のとおり危險をおかすことにつながるけれども、タキシラという限られた地域に關しては、現在のところ、建物に相對年代を與えるもっとも有效な手がかりを提供している。

タキシラ第三都市はその最後の段階において地文様積 Diaper Masonry という堅固な建築技術を生んだ。それ以前は野石積 Rubble Masonry で、大石を並置してその間隙を小石でうめるやり方である。大石すなわち地石の大小も小石すなわち間石の大小もそれぞれ全然不統一で揃わない。これを第Ⅰ期石積とよぶ。佛教寺院にはこの石積法に從っているものが若干あり、それはタキシラにおける最古の佛教寺院である。この場合、佛塔は内部をこの石積法で築き、外面はカンジュール Kañjūr という地方的呼稱の多孔軟質の加工の容易な石を切り、組みあわしている。タキシラ第三都市第二層で示されるインド＝パフラヴァ時代には、この方法に從った塔處が市街に面して數ヶ所ある。この石積法に從った建築はおそらく紀元後二五年ごろに大地震によってほとんど倒壞した。ジャンディアール神殿やダルマラージカー大塔の伏鉢がこの地震によって破壞された。このちの復興に導入された石積法が地文様積であって、筆者はこの石積法によって建設された時期を第Ⅱ期とよぶ。壁面にあらわれた石積は、地石の高さと底部を相互に統一しながらならべ、地石と地石との間にうすく厚さのととのった片岩を間石として積んでゆくものである。第Ⅰ期と第Ⅱ期との石積のあきらかな相異は、このような間隙充塡の石にみられる。瓦のように厚さがさだまって薄手の平石を用いるところにある。第Ⅲ期以降第Ⅳ期までの石積法は、基本的には第Ⅱ期からの發展である。間隙に積みこむ石はしだいに粗く大きくなる。厚みがまして、扁平に整った初期のものに對し、粗雜さがいちぢるしくなる。同時に地石の大きさもます。地石の下底は、當初かならずしも平坦ではなく、凸面を殘しているものもあったが、なるべく平坦な底面になるように加工するようになる。このように間石があらく地石が大きくなった地文様積の段階を第Ⅲ期とよぶ。

この段階からさらに變化して、地石の大きさがほとんど同じ大きさにそろえられ、地石をならべた水平列の間に平石の列がはいり、この平石列が地石列と層序を形成する傾向をみせる段階を第Ⅳ期とよぶ。平石の厚さは第Ⅱ期のように厚いが、大きさを加工してそろえる傾向が生じている。第Ⅳ期石積法がもっとも發達した段階では、地石と地石との間に積まれた間石の高さは、地石の高さに等しく、しかも間石の積みあげは地石と地石との間に縱に一列を整齊に並べる。一方、第Ⅳ期で地石の水平列と層序を形成しつつあった平石の水平列は、かならず二重列か三重列であり、いずれの平石も大きさを長方形にそろえ、

地石と間石との大きさの差も縮まってしまった。この最終段階を第Ⅵ期といい、第Ⅵ期と第Ⅳ期との中間の時期第Ⅴ期は地石列と層序をなす平石列が一重で、個々の大きさに統一がある。

マーシャルはこれら六種の石積法に絶對年代を與えている。しかし筆者は絶對年代に關してはマーシャルに依據することを敢えて避ける。第Ⅰ期石積法と第Ⅱ期石積法が第三都市第Ⅱ層に前後してみられ、その間に大地震が介在していること、大地震の前後ともゴンドファーレス王發行の貨幣が大量に出土していること、そしてフィロストラートスの『ティアーナのアポロッニウス傳』にみえるアポロッニウスがタキシラ第三都市に到着したこと、などを注意するにとどめておきたい。

第Ⅰ期塔東僧西

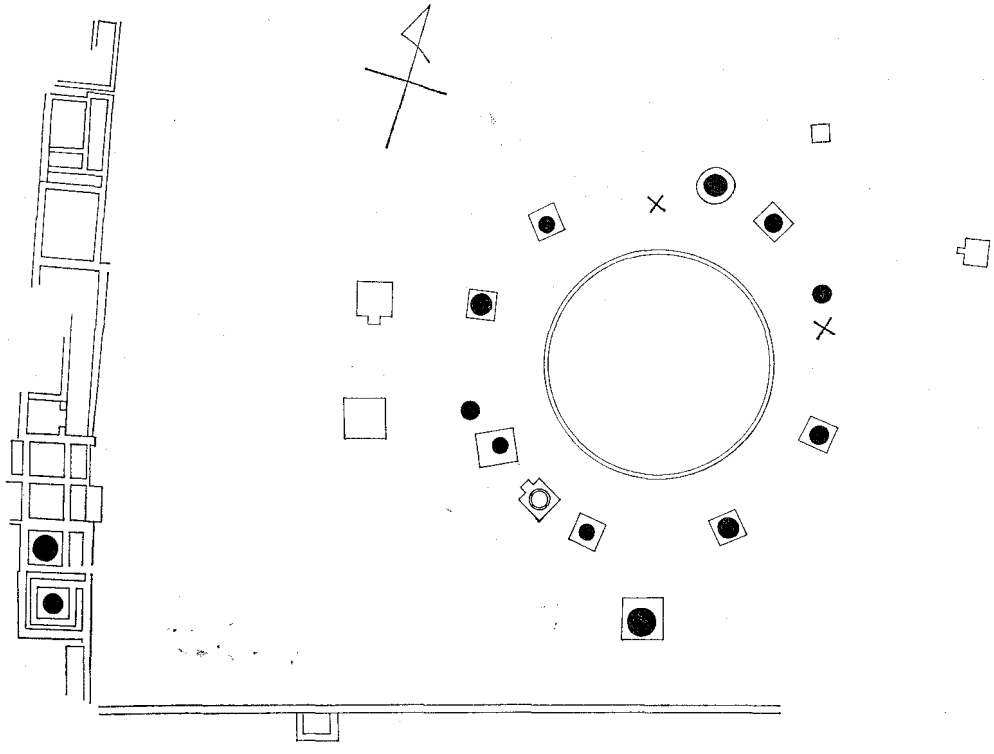
ダルマラージカー大塔は圓形基壇で、その上に圓筒部と伏鉢とをおく。伏鉢の內核は、車輪のスポークのように中心から放射狀に一六の壁をきづき、この壁にかこまれた部分をまた石積で充塡している。放射狀の壁の下部は、基壇にくいこんでおらず、既に存在していた基壇の上につくられたもので、塔創建當初にはなかったのちの時代の改修である。また圓筒部の東北壁面に第Ⅱ期石積がみられ、これもまた第Ⅱ期における補修である。放射狀の壁は第三都市第二層の時期のC′地區における佛塔石組みと原理的に類同する。これらの事實によってダルマラージカー大塔圓筒部分以上は第Ⅱ期に屬し、それらが築かれた基壇部は第Ⅱ期以前に屬することがしられる。したがって第Ⅰ期寺院の一部として現在理解できるダルマラージカー大塔は平面圓形の基壇に限られる。

大塔をとりかこむように多くの祠堂が現在みられる。その石組には大塔東北部分の補修壁と同一の第Ⅱ期石積法にしたがっているものがある。第Ⅱ期石積法による祠堂群は小規模な建物を削平した上に築かれている。この小規模な建物は第Ⅰ期石積法にしたがって建られたものである。それを圖上で復原してみると挿圖1のとおりである。×印をふくめて九基の方形基壇の

上に圓形平面の構築物があった。この他にも圓形基壇や長方形基壇のうえに圓形平面の構築物をもっていたものが四基あり、南へややこの列からはなれて一基あった。その他にもこれらとは別々に離れて北東に二基、西に二基の佛塔があって、第Ⅰ期の石積法にしたがっている。このような構築物のうちで、最初にあげた九基はマーシャルによってストゥーパと斷定されたが、ほぼ等間隔に同様な規模で配置されていて、圓筒形の立ちあがりが高く、ストゥーパの圓筒部としてこれらは高すぎる。スワートにおける例から（D. Faccenna, *A Guide to the Excavations in Swāt (Pakistan) 1956–1962*, Roma, 1964, pp. 53–54, pl. XII）、スタンバ Stambha と考えた方がよかろう。

ダルマラージカーにおけるこの時期の僧坊は二ヶ所にある。ひとつは大塔の西方に北へ一列に並んだ建物群であり、もうひとつは大塔北方にある。どちらも數段の階段をのぼり、大塔の位置しているレベルよりも高い。前者は少くとも前後二室をそなえた一對の房室が一列にならんだ形をとり、僧坊南端からは東へ一直線に低い垣壁をもうけ、大塔の南まで續いている。この垣壁と僧坊とによって大塔がとりこまれていることが注目される。垣壁の東部、すなわち大塔東方には、垣壁が現存しないが、大塔北方は一段高い土地であり、垣壁が不必要であったのかもしれない。この一段高い地區にもうひとつの僧坊が現存する。大塔區の北からのぼってすぐ左側に西へのびる房室群があり、西端からかぎ型にまがって北へとのびる房室群があり、この兩群によって僧坊が形成されている。いずれも大塔區の僧坊と同じく一對一列式のプランになっている。僧坊の東には南むきの方形基壇をもつ佛塔が二基離れて建っているが、西方の一基は僧坊から出た垣壁によってその南部と東部とをかこまれており、大塔區のあり方と同類である。發掘者マーシャルはこれらの塔や僧坊もともに大塔に附屬する役割をもつと考えたけれども、筆者は少くとも第Ⅰ期石積法の時代には大塔區とは別個の佛寺として獨立させた方が自然であると考える。したがって大塔區をダルマラージカー大塔寺とよび、その北方のひとまりをダルラージカー北寺とよぶ。

第Ⅰ期石積法に從った佛寺には、ダルマラージカー所在の丘陵とはまったくことなる平地、第三都市北郊に、ジャンディアールB、A兩寺もある。B寺には南向き正面の方形基壇をもつ一基の佛塔が四周をほとんど正方形に垣壁でめぐらされている。

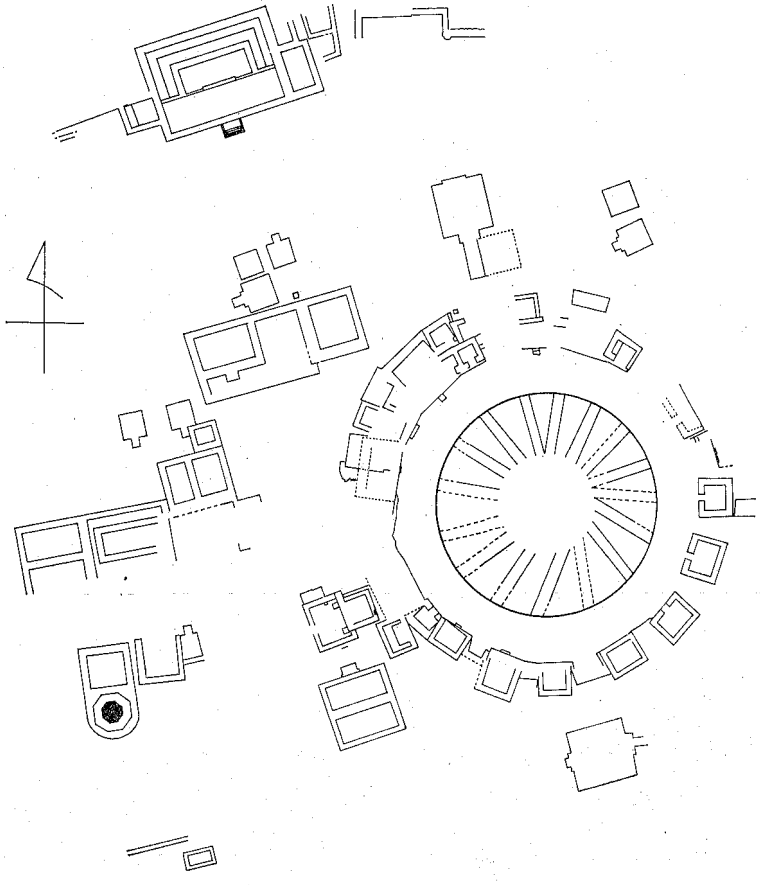


挿圖1　第I期ダルマラージカー大塔寺　(1: 1300)

垣壁西壁はそのまま僧坊の東壁となって、長方形プランの房室が數室南北に併行して一列存在する。垣壁北側には通廊を隔てて數室の小部屋があり、東端は居室というよりも禮拜對象を安置したと考える方が妥當であるようなプランの、長方形の一室に終っている。マーシャルは、このような垣壁に接して建てられた一連の室群がその基礎石組を殘すだけで、しかも各室がいちじるしく方形であることから、これらの室群を僧坊と決定することに否定的である。しかし、前記ダルマラージカーの大塔寺や北寺の僧坊列をみると、細長い方形の房室とそれよりも正方形に近い房室あるいは方形の房室とが對になって列を形成しているのであり、ジャンディアールB寺の室群の構成と類同している。したがってジャンディアールB寺の佛塔と僧房との配置關係もダルマラージカーにおける兩寺と同式とみるのである。ジャンディアールA寺は南向き方形基壇の佛塔が一基あるだけである。內核は粗くくだいた石灰岩と河原石とを泥土でつなぎとめて築き、壁面は加工調整の容易な軟質のカンジュール石のブロック積みであり、B寺の塔とまったく同じ形式である。また位置關係もA寺塔がB寺の北西にやや離

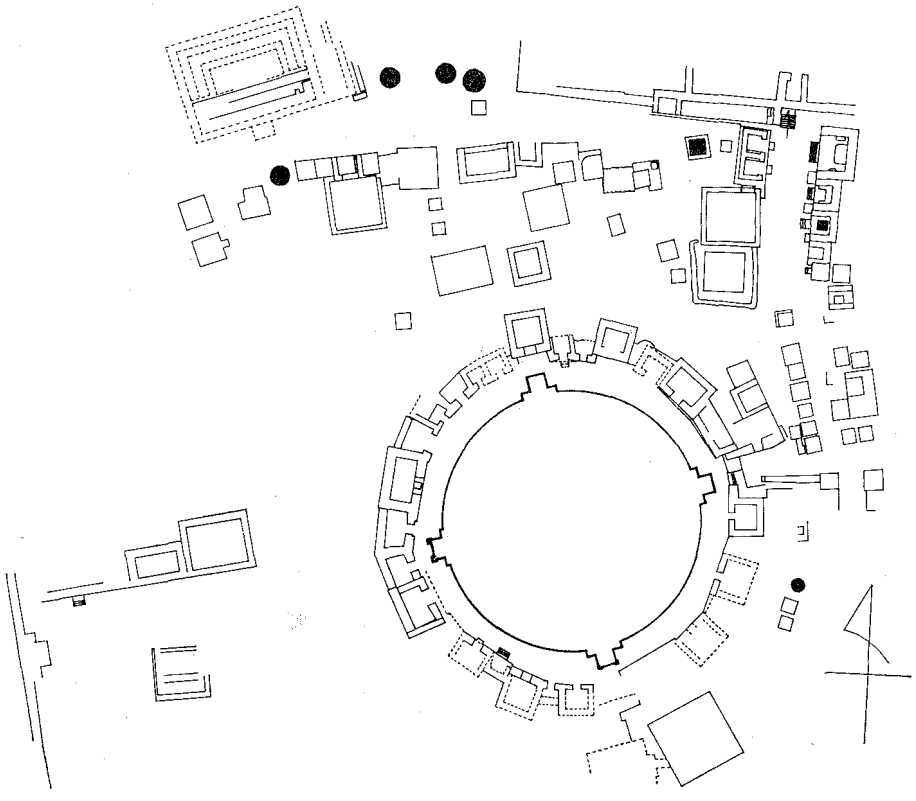
れて建っていることであるから、このA寺は、ダルマラージカー北寺のように、垣壁外側に建てられたB寺のもうひとつの塔とみた方がよい。別の一塔を垣壁の外に、しかも北側におく例は、第Ⅱ期石積法によったピッパラ寺にみる。したがってB寺のなりたちを上のように考えることは、後代につづく配置として重要である。

この時期の僧坊は、前述のとおり、一對一列が特色である。そして塔地の西側に普通たてられた。塔はしたがって僧地の東にあり、四周を垣壁をもってめぐらし、塔自身はダルマラージカー大塔をのぞいてすべて方形基壇で南に向き、カンジュール石の切石外装である。都市域外の佛寺のもっとも早い第Ⅰ期の様相にはこのような一定の規律がある。



挿圖2　第Ⅱ期ダルマラージカー大塔寺　(1：1300)

佛塔に關しては第三都市の內側のものとの關係が論じられなければならない。しかしそれらは市街地にもうけられて單獨で存續したものが普通であり、僧衆の住處がないものが多い。ここでは伽藍の配置に焦點をあてた關係で、詳論することを避ける。第三都市內の佛塔もカンジュール切石の外装である點が市外の塔と一致し、特殊な griha stūpa である1D區の寺院や第Ⅲ層期に基礎をもつ1E區の小さい圓形プランの佛塔のほかは、みな方



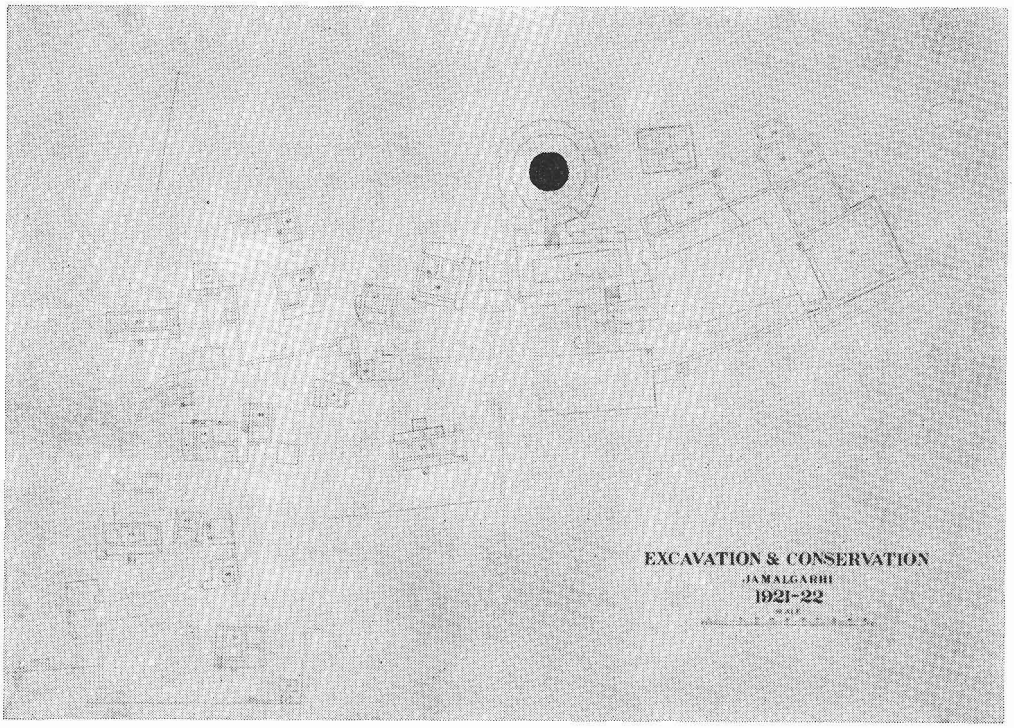
挿圖3　第V，VI期ダルマラージカー大塔寺　(1：1300)

形基壇で塔莊嚴の簡素な點など、市域外にある僧地を伴う佛塔と同類である。第I期より既に方形基壇が使用されたところは、この地方における佛塔に對する態度がすでに最早期から北インドと異なる傳統にあったことを示すものである。

第II期方形僧坊出現

八ヶ寺の創建、ダルマラージカー大塔寺の再建と增廣などがおこなわれた。ダルマラージカー附近ではチル＝トープの寺院群A、B、C、D1、D2が建立され、タムラー＝ナラーをなかに對岸の丘陵北麓にカーラワーン寺、この丘陵の東南部の小盆地にギリC＝D＝E寺、丘陵の平野にむかった斜面にピッパラ寺が建立された。建立された寺院數は、第I期から第VI期までのうちでもっとも多い。

ダルマラージカー大塔は、第I期の基壇のうえに一六本の放射狀の壁を築き、間隙に石を充塡した構造の伏鉢に改築された（挿圖2）。また基壇上面と圓筒部とが接する部分に補修がみえる。大塔周圍の狀況は第I



挿圖4　ジャマール＝ガリ寺

期とおおいにことなってくる。第Ⅰ期にあったすべてのスタンバなどは地震によって柱部があらかた倒壊したので、この廢材を埋め、その上にあらたに建てられたのが、スタンバではなく方形單室を一單位とする祠堂群である。その配置は、第Ⅰ期のスタンバ基壇を避けながら、大塔へは四方から近づくことができるようにスペースをとり、祠堂正面がどれもみな大塔の方をむくようになっている。後代の重修によって不明な部分もあるが、第Ⅱ期のはじまりの様相はおそらく大塔東南の五祠堂のように同規模等間隔でつくられたものと考えられる。北西部のように大塔に直接對面する祠堂群とその外側にたてられた祠堂群の場合は、むしろそれよりおくれ、しかも外側にある祠堂の方が對面する祠堂よりおそい建立であろう。いずれにしても祠堂は高くそびえるものではない。ダルマラージカー大塔のように、圓形平面の佛塔の周圍に、佛塔と一定の間隔をあけて、佛塔に對面しながら祠堂をめぐらす塔院の建物構成は、ガンダーラのジャマール＝ガリ Jamāl Garhi にみられるだけである（挿図4）。

ダルマラージカー大塔寺では、そのほかにも大塔から離

れた場所に多くの建物がたてられた。それらは大塔と第Ⅰ期に建てられた僧坊との中間に、すなわち大塔西側に主としてある。佛塔は北に集中して八基、南に第Ⅰ期の増廣の分が一基ある。これらはみな野外に築かれた方形基壇をもつ佛塔であるが、これとは別にグリハ＝ストゥーパが一ケ所建てられている。建物平面は第三都市第Ⅱ層1D區のもの（"Apsidal Temple"）と同じであり、この系統を引くものと推定されるが、規模は小さく、建物全體をとりかこむ通廊や外陣前面のポーチはない。内陣の八角形平面であることがダルマラージカーの特色である。このほかには、北西端に一棟、大塔西に六棟の建物がある。そのうちで北西にある一棟の建物は、長方形平面で、その長邊のうち大塔側中央に階段をつけて正面とし、内部は中央で外陣と内陣とにわかたれ、内陣もまた長方形の室となっている。このような構成は、第Ⅰ期ジャンディアールB寺の場合とは遠く、スワートのブトカラ塔院のものと近縁であろう（*A Guide to the Excavations in Swat, Pakistan, 1956-2962*, Fig. 5）。ダルマラージカー大塔寺の僧坊は第Ⅰ期のものがそのまま使用されていたと考えるほかはない。なぜならばこの時期ではもう第Ⅰ期のような僧坊形式は新規につくられていないからで、新規につくられる場合はみな方形僧坊のかたちをとっているからである。そうすると大塔西の六棟の建物を僧坊と考えるわけにはゆかず、禮拜對象物をおいた建物とみる方が自然である。

第Ⅱ期創建のカーラワーン寺はきわめて特殊な塔院構成をみせている。若干規模に差があるが、いずれも方形基壇の二基の佛塔を同方向にむけて併置し、さらにこれとならべてグリハ＝ストゥーパをおき、これらにむかって左には一棟のグリハ＝ストゥーパを、むかって右には少くとも三棟のグリハ＝ストゥーパをならべ、これとともに佛堂（?）もおいている。

塔院の佛塔は一基が他を壓して大きく、主塔あるいは中心塔の性格をもつのが普通である。カーラワーン塔院は正面に屋外の佛塔があるが、これはむしろ規模からも主塔とはいいがたく、ひとつの廣場の三方に同價値の禮拜對象を配置したものである。マーシャルは、このような屋外の佛塔のかわりに、建物の中の内陣に小さい佛塔をおくやり方が流行したと考えた。たしかにこの時期になって、ダルマラージカー大塔寺や創建されたチル＝トープB寺には、グリハ＝ストゥーパがみられるが、第Ⅱ期の全寺院における流行ではない點を注意したい。

塔院の背後に僧坊がある。二ヶ所に僧衆の住處があり、兩者の中間に廣間がある。一方の僧坊はほぼ正方形のプランで中庭をもち、四邊に房室列をもつ四面僧坊とでもよぶべきもので、別の一つはやはり方形の中庭を中心にして長短各一邊だけに房室列をもつ。房室列のない短邊は大小各種の部屋に通じ、さらに廣間に通じて、四面僧坊へ連絡している。このようにカーラワーン寺の僧坊は、第Ⅰ期における一對一列制の僧坊形式ではなく、ひとつの方形の中庭を中心に同規模の房室が集中する形をとりはじめている。また第Ⅰ期の房室が基本的に細長い長方形と正方形に近い長方形とを組みにしたものであったのに對して、ほぼ正方形の單室にかわってしまっている。この僧坊と塔院との間に、塔院の方にむかう祠堂列が建立されている。塔院より約七〇センチあがった基壇上にあるこの祠堂は、規模がさまざまである點が特色である。

カーラワーン寺と同じく第Ⅱ期の建立でありながら、ピッパラ寺は、カーラワーン寺の伽藍配置とはまったく異なった配置である。佛塔は、カーラワーン寺と同じく二基が同時に建立された。ところが一基は正方形に四周を垣壁がとりかこみ、他の一基はこの垣壁の外側におかれている。垣壁内にある佛塔は四基の小塔を漸次ともなっていったのに對し、外側の塔は小塔を全く伴うことがなかった。佛塔が垣壁の内側に存在して外界と域を異にしている塔院は、第Ⅰ期における通例であり、その場合塔院が東側にあるのに對し、僧坊は西にあった。そのうちでもジャンディアールB寺は垣壁の外の佛塔が垣壁の北東にあり、ピッパラ寺と類似している。ところがピッパラ寺の僧坊は、塔をかこむ垣壁を完全にとりかこんでいる點が特異である。この僧坊の西側は後代にあらたに僧坊をたてたので現況ではみえない。しかし、カーラワーン寺のような四方に房室がならぶ方形の僧坊があって、その内庭に垣壁にかこまれた塔院があったと理解してよいのである。また垣壁の外側を僧坊がとりかこむのは、第Ⅰ期において垣壁の西に沿ってならんだ僧坊が、北、南、東へとのびていった自然のなりゆきの結果と考えるならば、第Ⅱ期ピッパラ寺の伽藍配置は、第Ⅰ期伽藍配置の發展した結果として理解することができ、當然第Ⅱ期に出現した中庭の四面を房室列がとかこむ形式の僧坊もこのような第Ⅰ期僧坊の變化したものと考えることができる。このようにピッパラ寺を位置づけてみるならば、同時代に創建されたカーラワーン寺の伽藍配置とは根本的に異なったもので、前代の系統を直接繼承し、

新しい時代の要請にそうよう僧坊が工夫されたものと解釋される。

チル＝トープ寺院群のうち、ダルマラージカーにもっとも近いD1寺とD2寺は、よりタムラー＝ナーラーに近く丘陵をおりたところにあるA、B、Cの三ケ寺より若干時期がおそく、第Ⅲ期に近づいた石積を示している。この二ケ寺がいずれも前代の系統をひくと考えるのは、D1寺塔院が垣壁をもつものであり、D2寺がピッパラ寺のように方形僧坊の中庭の中央に佛塔を置くからである。しかもD1寺は塔院の西壁に沿って僧坊がある點が第Ⅰ期の名殘りを示し、僧坊が中庭とその四方の房室から成る點に新時代の特徴を備えている。D2寺は殘存の狀態がとくにわるく、伽藍全域のなりたちを把むことができない。ただピッパラ寺と異なる點は、佛塔に垣壁がないこと、方形僧坊の南側には内庭の方に開口した房室列が絶無であること、また東側にはカーラワーン寺やチル＝トープD1寺のような廣間があったらしいこと、などである。

チル＝トープA、B、Cの各寺院は塔地と僧地とが個個別別に獨立し、かつ兩者が對面している形式である。すなわち、ギリC＝D＝E寺やチル＝トープD1寺やピッパラ寺などのように塔院と僧坊とが接していない。そして佛塔の正面階段は僧坊入口とむかい合い、佛塔と僧坊は同一正中線上にあり、それぞれ左右對稱の外郭を示している。

ギリC＝D＝E寺はチル＝トープD1寺と基本的には同じ性格の伽藍配置である。

第Ⅱ期は大地震後に導入された石積法に從った時代で、石積法の改良はあったが、伽藍の配置は前代の系統を引きつつ、あたらしい樣相を加えることになった。そのあたらしい樣相とは、内庭を中心として四邊に單室列を配置する僧坊―方形僧坊―であり、僧衆が起居する用途の建物に附屬して、僧衆の日常生活の用とおそらく宗教的な集會の用とをもった、規模の大きい室群、この二大施設を指すことは言うまでもない。第Ⅱ期のような伽藍配置を示す寺院がこれまで調査されたガンダーラ地方やスワート地方において絶無であることは重要な事實である。

第Ⅲ期四面僧坊確立

第Ⅲ期の石積法に從ってジャウリアーン、モーラー＝モラードゥ、カーラワーンHの三ケ寺が創建され、カーラワーン、チル＝トープB寺、ギリC＝D＝E寺の三ケ寺の改修がおこなわれた。

カーラワーンH寺は小規模であるが、僧坊は方形で四面に房室をもち、內庭に廣間をつくっている。この僧坊はガイ Ghai の僧坊と同じで (J. Marshall, *Taxila*, vol. I, pp. 353–354, vol. III, pl. 89, a, b.)、タキシラではこの二ケ寺にみるだけの特殊な僧坊である。佛塔の方向は北西で、僧坊の入口は西南にあるから、僧坊と佛塔とは對面しない。しかし、塔の方へ直接出られるように僧坊はひらかれている。

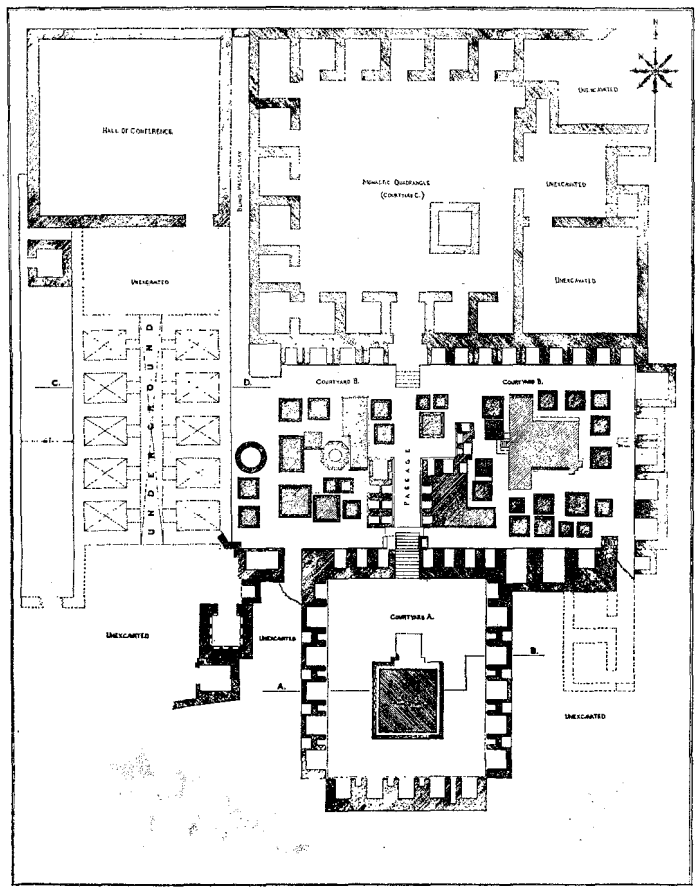
ジャウリアーン寺もモーラー＝モラードゥ寺も、カーラワーンH寺と同じく佛塔と僧坊とだけで構成される。ジャウリアーン寺の塔は面積が小さいが、モーラー＝モラードゥ寺の塔と形態が類似し、基壇の丈が高い。ジャウリアーン寺ではこの主塔むかって右奥に小塔が奉獻されている。塔の北に塔地から一段低いテラスがあり、テラスの東に僧坊がある。僧坊入口はこのテラスにむく。僧坊は完璧な四面僧坊で、塔の占める面積に比して規模が大きい。塔と僧坊とが對面しない伽藍配置である。

モーラ＝モラードゥ寺もジャウリアーン寺と同じく、廣大な僧坊と丈高い基壇の塔で構成されている。ここでも兩者はむきあわず、塔は西、僧坊は東にあり、塔地は僧坊と別の臺地にある。僧坊は北側に入口をもつ。

カーラーワーン寺では塔院に小塔が奉獻された。むかって右の塔の正面階段の左右に大小各二と右奥に一基、むかって左の塔の正面階段右に一基、計六基がこれである。カラワーンは第Ⅱ期に出現して、タキシラやガンダーラなど西北邊彊地方では特異な塔院構成を示していることをすでに注意したが、そのなかでとくにカーラワーン塔院に特徴的であったのは、グリハ＝ストゥーパの多いことであった。その傳統は第Ⅲ期にも引き繼がれ、第Ⅱ期のグリハ＝ストゥーパのとなりに接して、同規模のグリハ＝ストゥーパが建立された。

チル＝トープB寺とギリC＝D＝E寺においてもカーラワーン寺と同様に主塔のまわりに小塔群が奉獻され、祠堂列が附屬することとなった。ギリC＝D＝E寺の祠堂列は垣壁南側の僧坊と接する一邊に、塔の方をむいてつくられた。このあり方はすでに第Ⅱ期でカーラワーン寺ではじまったものであるが、第Ⅲ期のギリでは各祠堂の規模がひとつに定まってゆく方向を示している。この方向はチル＝トープB寺においてもみられる。ただチル＝トープの場合は五室一棟の獨立建物として塔のむかって左手にあることが、カーラワーン寺やギリC＝D＝E寺のごとく、建物壁に對して造りつけられた場合とは異なっている。

第Ⅲ期創建の寺院の伽藍配置は、四面僧坊と塔との組みあわせが確立したところに特色がある。そして前代で出現した塔僧坊對向式の系列ではなく、僧坊と塔との方向は一定しない。しかし、塔を西に僧坊を東におおむね置くということは言える。一方、塔院における變化は、前代からひきつづいている寺院に關してのみ、多數の小塔が附加され、單室の祠堂列がおこなわれるようになったことにある。



挿圖5　タフティバイ寺

第Ⅳ期造寺停滯

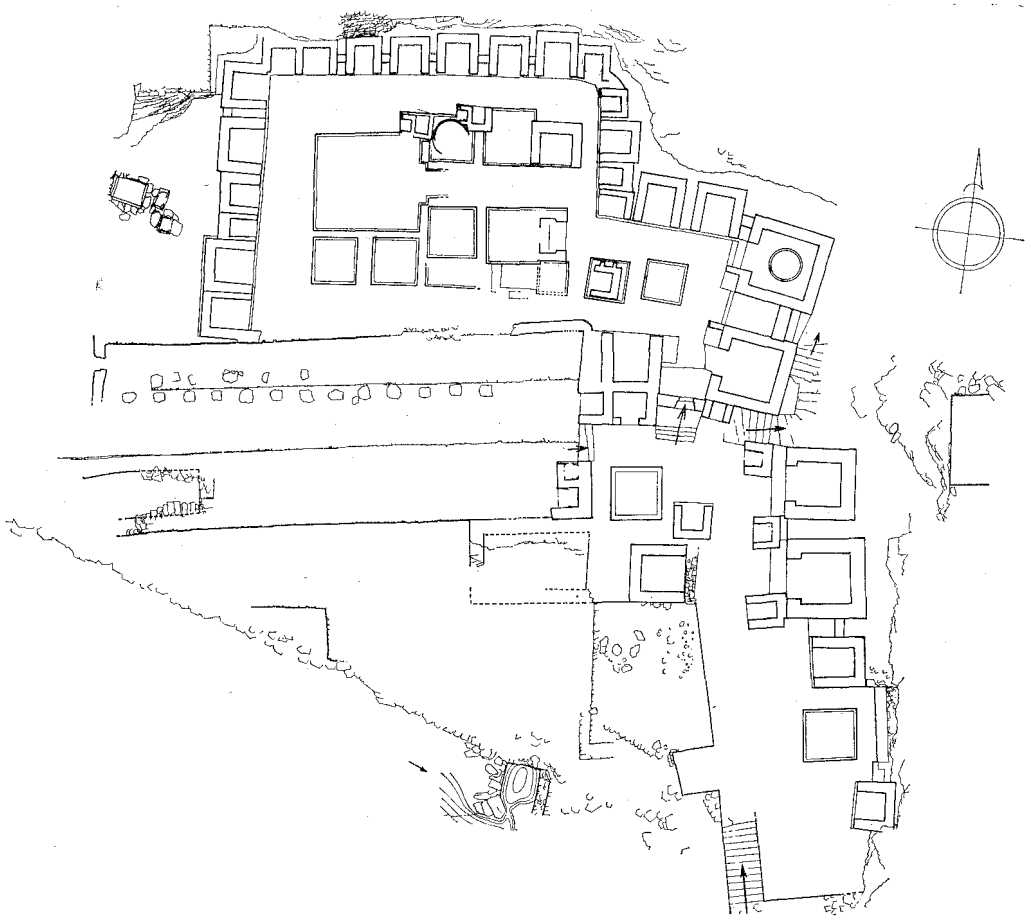
第Ⅳ期はあらたに寺院が建立されることがほとんどなかった。それに對してジャウリアーン寺、ダルマラージカー北寺、ジャンディアールB寺に新しい局面が展開した。

ジャウリアーン寺では僧坊は前代のままで變化はない。塔院の面目が一新した。もともとひときわ高い位置にあった塔院は、この時期に四面に單室の祠堂列をめぐらし、主塔の周圍には小塔が多數密接して奉獻され、しかも祠堂の高さは巨高化したので、塔院全體は城塞のような外觀を與えることになった。さらに、主塔を中心にしたこの塔院におさまらなくなった小塔は、この塔院の前の一段低いテラスを整備することにより、配置されることになった。主塔の周圍に比較的規則的に小塔が配置されるのは、第Ⅲ期のカーラワーン寺やギリC=D=E寺以來のことであり、ジャウリアーン寺の塔院における小塔群もこのような前代の系統を引いて、一層充實したものである。

ところがジャウリアーン寺で確立した主塔＋小塔群＋祠堂列という構成をもった塔院は、タキシラではこの他にまったくみることができないのに對し、ガンダーラではほとんど寺院の通例になっている點をとくに指摘する。挿圖5、6、7で一目瞭然のとおり、タフティ=バイ Takht-i-Bahi、メハサンダ Mekhasanda、タレリ Tareli の各寺院の塔院はこれにしたがっていることを示すにとどめておく。

ダルマラージカー北寺は第Ⅰ期に建立されてからそのまま第Ⅵ期まで引きつづいて用いられていたようである。第Ⅳ期にはタキシラ最大の僧坊が、北寺の北東に建設されたが、存續していた北寺との關係はまったく不明である。この僧坊は內庭をはさんで北、東、西の三面に房室列をもち、南に少くとも五室の大室をもち、さらにこの方形僧坊の東南に接する集會堂などによって構成されている。

ジャンディアールB寺もダルマラージカー北寺と同じ運命をたどったもので、第Ⅰ期ののちすぐ廢絶したのではない。卷末の圖表の第Ⅳ期におけるプランに示した主塔のまわりの二基の小塔は殘りがわるく、立ちあがりがすくないので、石積をはっきり觀察できないが、第Ⅰ期のものではなく、おそらく第Ⅲ期までに奉獻されたものである。その時期を小塔奉獻の傾向が出た第Ⅲ期に當てても大過ないであろう。いずれにしても、ジャンディアールB寺は第Ⅳ期に僧坊の壁を第Ⅳ期石積法にしたがって部分的に建て直しており、第Ⅳ期のはじまるまでにあるていど放棄されていたことは確かである。したがって第Ⅰ期石積



挿圖6　タレリ寺塔院（1：400）

による塔（方形基壇の）もあらかたこわれ、それを清掃して第Ⅳ期に圓形基壇の塔があたらしく造立されたのである。

第Ⅴ期舊寺改修

これまでに建立されて存續してきた寺院において大規模な改修が、堅固さの點で一層工夫された石積法にしたがっておこなわれた。舊壁のプランはあまり變更せず、石積をかえたのである。しかし、改修後の建物は巨高化する傾向にあり、祠堂であれば安置する禮拜對稱の巨大化と密接に關係し、塔であれば基壇自身の高さ（基壇が數層に及ぶこと）や圓筒部の高さをましてゆくことを示す。

この時期に創建された寺院はクナーラ寺とラールチャク寺である。クナーラ寺は發掘の進行中大塔の圓筒部西北隅からきわめて小さい塔が出現した。塔は第Ⅰ期におけ

る石積法にしたがっていたので、發掘者はこれを第Ⅰ期にさかのぼる塔と斷定した。ところが、これをつつむ大塔も、その附近にある僧坊も、いずれも第Ⅴ期の石積法にしたがう建築である。そしてこの建築のほかには第Ⅳ期にさかのぼる建物はもとより、第Ⅰ期所建のものもなかった。このような狀況のなかで、問題の小塔が大塔の基壇上にのっているという事實は、小塔が絶對に第Ⅰ期のものでないことを示す。小規模の構築であるから第Ⅴ期のような堅固な石積法にしたがう必要がなかったと考えざるを得ない。したがってクナーラ寺の伽藍構成は第Ⅲ期のモーラー＝モラードゥやジャウリアーンの系統をひく構成で、同じジャウリアーン寺でも直前の第Ⅳ期の塔院構成にはつながらない點をとくに記しておく。

ラールチャク寺の石積はクナーラ寺とほとんどかわらないからほぼ同時に建立されたとみてよい。ところがラールチャク寺の伽藍配置はきわめてことなっている（J. Marshall, *Taxila*, vol. I, pp. 388-390, vol. III, pl. 112）。僧坊は方形僧坊ではなく、二階建ての小規模なもので、殘存した階下は六室により構成され、中庭もない一棟である。塔は二ヶ所にあり、ひとつは西むきの方形基壇をもち、正面階段は前方にむかって幅が廣くなっている。その點クナーラ塔と同類である。もうひとつの塔は、僧坊と西向き塔とを結ぶ延長線上の東南にあり、長方形の垣壁の中央に位置している。塔にむかって左にはグリハ＝ストゥーパ、むかって右に長方形建物の跡があり、グリハ＝ストゥーパの北に小塔の基臺が殘っている。

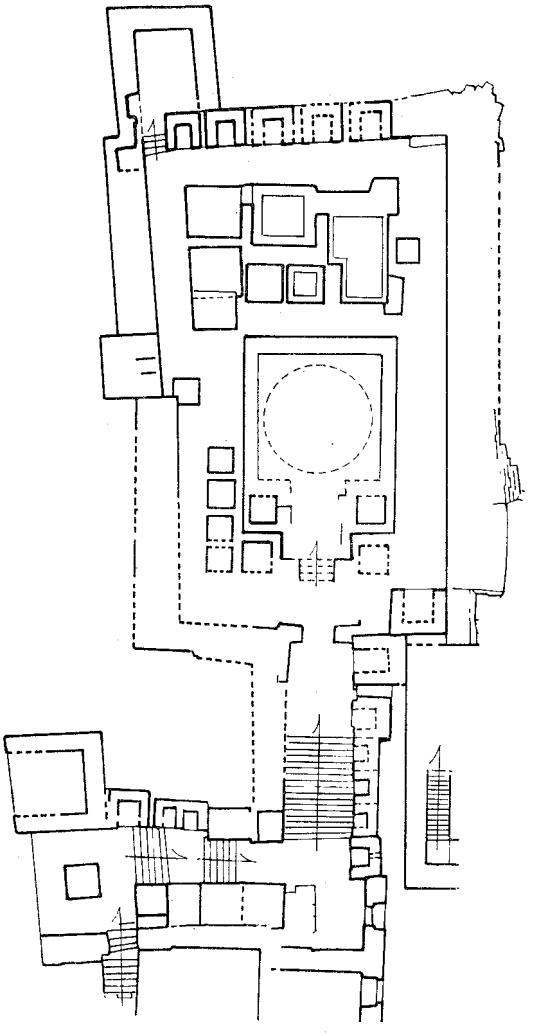
モーラー＝モラードゥ寺やギリC＝D＝E寺では全般に改修があったが、あたらしく祠堂を設けたり、小塔が奉獻されることもなかった。チル＝トープB寺は、第Ⅱ期の方形僧坊の西に、もとの僧坊より小さい一一室から成る方形僧坊が增築された。ギリA＝B寺でも四面僧坊が建てられたが、この寺の塔は殘りがわるく、建立の時期が決定できない。ただし佛像はその周圍から全く出土していない。

カーラワーン寺では、主塔群の正面に獨立した祠堂が二基建てられた。ひとつは長方形横長の內陣とそれをかこむ正方形外壁とで成り、內陣の壁にそって繞道があり、內陣前方に外陣がつくられている。別の一堂は、全體が正方形で、その中央に隔壁をつくって內陣と外陣にわけ、內陣の左右奥三壁に一段高い段を設けて佛像安置の用に供している。おのおのの祠堂の面積

は塔とほとんど同じ廣さである。塔のむかって右手のグリハ＝ストゥーパの前面に禮堂と背後に祠堂とがつくりつけられ、塔むかって左側に並んだグリハ＝ストゥーパの横にも三つの祠堂がつくりつけられた。さらにこの寺院の西南にもっとも規模の大きい四面僧坊が增築されている。

ダルマラージカー大塔寺では、大塔自身に增廣がみられる。四方に階段をつけて塔のまわりを直接繞道できるようにした。その他は大塔の北と南に數基の小塔が奉獻されただけである。

第V期は石積が堅固になって大改修や增築はおこなわれたけれども、伽藍配置自體に大きい變化はおこらなかった。新しく造營される場合でも、その形式は前代までに出現した形式を踏襲するか、あるいはそのような形式の系統にはいるものばかりである。ラールチャク寺の配置は新規であるが、個々の要素であたらしいものは、クナーラでもみられた正面階段が前方にむかって幅廣くなることくらいである。



挿圖7　メハサンダ寺塔院　(1：400)

第VI期十字形佛塔

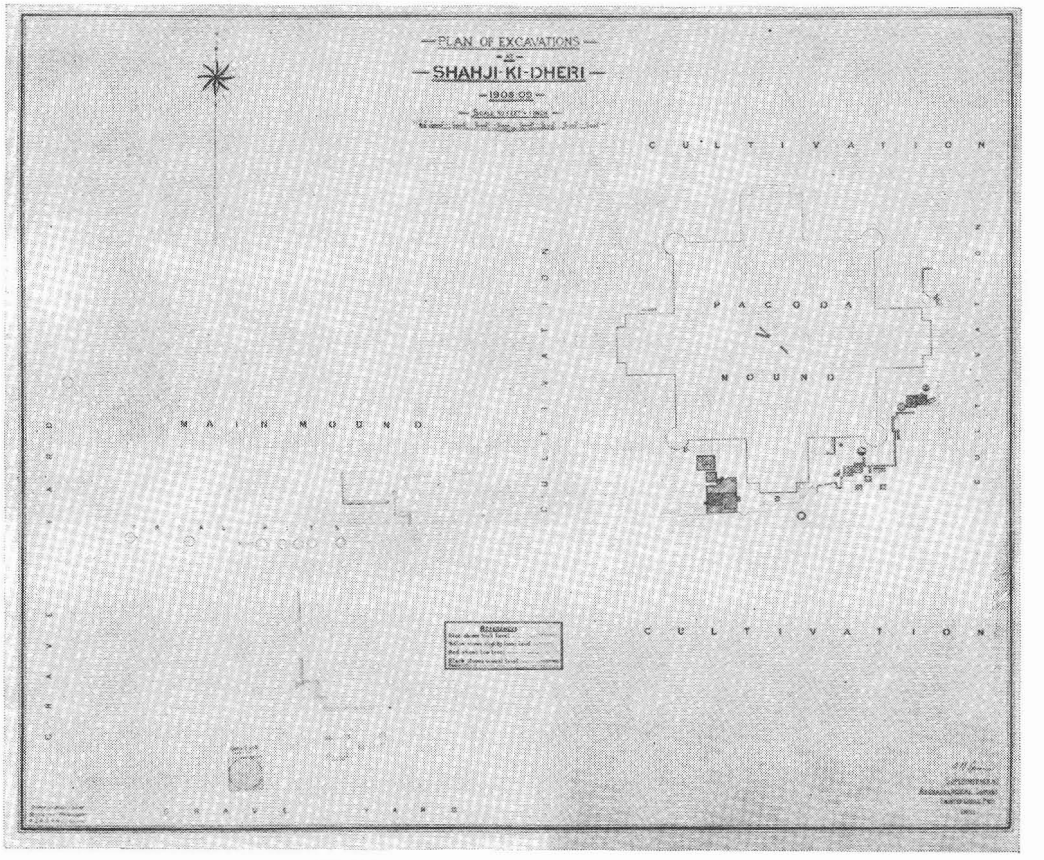
ダルマラージカー大塔寺では、大塔周圍に三基の祠堂、塔北に五祠堂、北から東にかけて一〇基の方形基壇の塔、東南に一基の圓形基壇の塔が造營された。ダルマラージカー北寺への入口は整備され、そこに南北に祠堂列がつくられ、

北寺の參道のような觀を呈するようになった。祠堂列には小塔をまつる一例があるほかは、みな巨像を安置していた。北寺では、第Ⅳ期に廣大な方形僧坊がたったが、第Ⅵ期までに廢絶していたか、あるいは大きすぎたか、何らかの理由によって第Ⅵ期にはこの大僧坊は東南隅四分の一に縮小され、同時に第Ⅳ期の廣間は內部を小分けして僧坊に改造された。兩僧坊の外側に小さい方形基壇の塔が二基建立され、第Ⅰ期以來の垣壁東外にあった塔に祠堂がつけ加えられたのもこの時期である。そして大塔寺にむかう入口が廣い寺域の南につくられ、全體は垣壁で大塔寺と區別されることになった。

ピッパラ寺では、第Ⅱ期から引きつづき使用されていた塔をかこむ方形僧坊は、この時期までに廢止していた。廢墟となっていたこの僧坊を埋め立て、あらたに二つの廣間を伴った內庭をもつ四面僧坊が、舊僧坊の西部の上に建てられた。同時に僧坊は舊來の主塔の方へ入口をひらくようになったが、塔地より數段の高所にある。塔院では垣壁の意味がなくなり、主塔の他に、新しく西向きの塔がつくられ、もとの垣壁北外の塔に垣がめぐらされた。

ジャウリアーンでは、第Ⅴ期に增廣はなく、第Ⅵ期になって「下の塔院」がはっきりした境界をもうけるようになった。すなわち、主塔＋小塔＋祠堂列で構成される塔院がひときわ高所にあるので、これを「上の塔院」とよべば、この塔院から正面階段を降ったテラス（第Ⅳ期に「上の塔院」からはみ出した小塔が造營されたテラス）の周圍に「上の塔院」と同じような祠堂列が建立されたのである。これによってジャウリアーン寺の規模は確定した。

この「下の塔院」形式は、同時代のダルマラージカー北寺の門前に造營された、祠堂列をもつ參道と同類である。ガンダーラ地方では、タレリ寺の塔院に至る參道（挿圖6）、メハサンダ寺の塔院にいたる參道（挿圖7）などがこれに相當し、スワート地方ではパンル Panr 寺にみられる。ガンダーラのジャマール＝ガリ寺では、主塔への登り口が方形のテラスで、ここに小塔群が祠堂列にとりかこまれて「下の塔院」になっているが、「上の塔院」形式が、小塔群なく祠堂列だけの構成であるジャウリアーン塔院とことなる。タフティ＝バイ寺は、南に塔、北に僧坊があり、對面形式の伽藍配置で、その中間の一段低いテラスに祠堂列にかこまれた主塔をもつ小塔群がある。中間が「下の塔院」に當るが、「上の塔院」にあたる南の塔院は東西南の三



挿圖8　シャーニジニキニデリー寺

方に祠堂列をもち、ジャウリアーン「上の塔院」と異なり、ジャマール＝ガリ寺に近い。

バマーラ寺はこの時期の創建である。主塔は四方に階段をもつ方形基壇で、その平面形は十字形を呈する。面積も基壇の高さもきわめて大きい。塔の周圍には不規則に一九基の小塔を配し、東方に外陣をもった三祠堂がある。これらは一括して數段高い臺地にあり、正面に玄關の間のような門口をもち、その左右兩翼に垣壁をもっていた。塔院へはしたがって正面の門口を通過する以外にはいることができない。僧坊は、塔院とほとんど對面して入口をひらいているが、兩者の間には數段低い空間があり、へだたっている。僧坊は四面方形の僧坊であるが、入口に近い兩隅に各一室が内庭へ突出し、若干他寺の僧坊とことなっている。バマーラ寺の最大の特色はしかしながら僧坊ではなく、主塔の十字形平面及び塔院入口を形成する門口である。十字形平面はタキシラに例がなく、ガンダーラ地方

ではシャー＝ジ＝キ＝デリー Shāh-ji-ki-Dherī 佛寺にあるだけで例がすくないが（挿圖8）、ガズニーのタパ＝サルダール Tapa Sardar 佛寺では奉獻小塔中に多數みられ、バルフのトーピ＝ルスターム佛塔、ヴァフシュ Vakhsh 河下流クルガーン＝チュービ Kurgan-Tyube のアジナ＝テパ佛寺の主塔、コータン Khotan のラワク佛塔、などに系譜を求めることができる。* そして近年の知見はアジナ＝テペもタパ＝サルダールもともに七ないし八世紀に當てることを指摘し、これら一連の十字形佛塔がバマーラをふくめて年代の降る可能性が強いことを示唆する。

＊十字形佛塔はこれら以外に、ドモコ＝ヤール Domoko Yar のファルハド＝ベグ＝ヤイラキ Farhad-beg-Yailaki 第六寺FⅣ、ヤール＝コト Yar Khoto カラ＝コジャ Kara Khoja、キチク＝ハサール Kichik Hassar にみられる。

塔院遷移

第Ⅰ期に創建された寺院ではみな南向きの塔をもち、垣壁に圍繞された塔とその外側に同規模かあるいはそれより大きい塔を配した。この形式がそのままうけつがれて第Ⅱ期ではピッパラ寺が創建された。しかし、第Ⅰ期のこの配置はすでに主流ではなく、第Ⅲ期以降は廢絶した。末期第Ⅵ期におけるピッパラ寺はまったく別系統の塔院として様相をかえたのである。

垣壁の外側に塔をおかず、ただ垣壁にかこまれた塔だけの塔院構成は、第Ⅱ期にチル＝トープD1寺とギリC＝D＝E寺において存續した。そしてこの系統は第Ⅱ期にいたって主塔の周圍に多數の小塔を伴うことになり、同時に垣壁を利用して基臺をつくり、その上に單室同規模の祠堂を列置することになった。このような祠堂列はすでに第Ⅱ期におけるカーラワーン寺で創建とともにはじまり、ダルマラージカー大塔寺においても第Ⅱ期から出現したのである。しかし第Ⅱ期では個々の祠堂の規模は一定していない。

第Ⅱ期には急激に造寺がおこなわれ、のちにのべるようにその伽藍配置も種類が多い。しかし塔のみに關しては、いちじるしく小さいピッパラ寺主塔のほかは、ほとんど同規模であり、小塔を附屬する主塔はピッパラ寺の例外をのぞけば、この時期

でも第Ⅲ期に近いチル＝トープCだけであり、小塔奉獻の流行には至っていない。ところが屋外の小塔がほとんどないのに對し、カーラワーン寺をはじめ、ダルマラージカー大塔寺、チル＝トープB寺におけるグリハ＝ストゥーパすなわち前後二室形式の塔廟が多いことは注目すべき現象である。そのうえ、カーラワーン寺やチル＝トープB寺では第Ⅲ期、第Ⅳ期にいたってもなおこの塔廟を增加したり、改修したりすることによって、塔廟の禮拜がすたれていないことを示している。しかもこの二ケ寺では小塔奉獻も第Ⅲ期の流行にのって併行することになった。おなじチル＝トープ寺院群でもA寺、C寺、D1寺、D2寺が早くに廢絶したのは、このような小塔奉獻もなく、塔廟もない寺院構成が反映する佛教內部の事情が社會に受容されなかったためであろうか。しかし第Ⅱ期創建の三ケ寺は第Ⅵ期まで存續した。これらは創建當初はほとんど主塔だけの塔院といってよいのである。

第Ⅳ期はすでにのべたようにあらたに寺院を興すことが停滯した時期である。その中でジャウリアーン寺の塔院は特異な展開をみせていた。主塔の周圍に多數の小塔をおき、それら全體を祠堂列が四方からとりかこんでひとつのまとまりにする形式、そしてこのような塔院へは正面のせまい通路によってのみ外界と連絡する。この形式の塔院は第Ⅲ期のギリC＝D＝E寺までつづいた垣壁をもった塔院の形式から派生したものとして理解できる。しかし垣壁は低いものであり、單に塔處を外界とわかつ意義をもつのにすぎない。ところが高大な祠堂を列置して、城塞のごとき外觀を與え、そのうえ入口は狹小という塔院は、垣壁にかこまれた塔處のもつ性格とおおいに異なってきたことが當然豫想される。したがって同じジャウリアーン寺でも第Ⅲ期の創建當初の塔處の性格とは急變しているわけで、このような展開を經た寺院がタキシラにまれで、ガンダーラに多いことは指摘したとおりである。そこにガンダーラとタキシラとの相異、いいかえれば、佛教がその社會とどのようなかかわりをもったかという點の相異があらわれているような印象をうける。

僧坊遷移

タキシラにおける最初期の寺院の僧坊形式を明確にとらえることができた。しかしこの形式はタキシラでもガンダーラでも例外中の例外、いいかえるならば第Ⅰ期においてのみ流行した形式である。なぜならば第Ⅱ期という早い時期からすでに內庭を中心にして四方に房室を列置する僧坊が出現し、以降僧坊はこの形式を襲ったからである。この變化は實に重要な意味をふくんでいる。第Ⅰ期の無庭縱列僧坊では會堂もなく、僧徒の行動は個別的であり、僧徒は相互にその行動を規制できない。會堂の不在は同時にこの事情を支持するものである。これに對して中庭のある方形僧坊は、狹く唯一の入口から僧坊にはいるや既に集團の一員であることを餘儀なくされる。僧坊內の各房室は對面からの規制を常にうける。僧徒の行動は第Ⅰ期の個別的自由を缺落し、集團の一員として規制されるのである。これをいいかえるならば、第Ⅰ期では僧團として僧徒個人の行動を放置しても僧團の規律から逸脫することがなかったのに對し、第Ⅱ期からは僧徒を機械的に僧團の規律にくみこむ必要が生じたという解釋もなりたつ。

方形僧坊は第Ⅱ期で二種ある。第一はピッパラ寺である。この僧坊の西側は、第Ⅵ期のまったく別な僧坊がその上に建っているので不明であるが、おそらく左右對稱であったと考える。そうすると個室の並列だけということになる。チル＝トープA寺、C寺も個室の並列であり、チル＝トープD2寺はそのやや時期の降る例である。これら三ヶ寺の僧坊內には一室をやや長めにつくってこれを塔祠堂としている。チル＝トープB寺では少くともこのような塔祠堂が三ヶ所ある。チル＝トープB寺では方形プランの一隅をさいて、そこに廣間が形成され、チル＝トープD1寺、ギリC＝D＝E寺やカーラワーン寺ではこれが主要な位置を占めるようになる。チル＝トープB寺を含めて、カーラワーン寺までの四ヶ寺の方形僧房がその第二の形式といえる。

第Ⅲ期になって創建されたジャウリアーン寺やモーラー＝モラードゥ寺、クナーラH寺では、廣間が完全に獨立した機能を

もっている。第Ⅳ期のダルマラージカー北寺、第Ⅴ期のクナーラ寺も同様で、第Ⅵ期のジャウリアーン、ピッパラ、バマーラになるとこの廣間が複數になり、時代をおって廣間の機能が增していったことを示している。カーラワーン寺やチル＝トプB寺では第Ⅴ期に方形僧坊自身の增築がみられ、ダルマラージカー北寺では第Ⅳ期の廣大な方形僧坊が廢絶してほぼその四分の一の廣さの方形僧房をもとの東南隅につくりかえ、廣間であったところも僧坊に改築された。クナーラH寺の僧坊はガイ寺の僧坊とともに特異な存在である。

伽藍配置五式

第一形式：佛塔の四方を垣壁がとりかこむプランの塔地に對して、僧坊が垣壁の西または北へかけて接する。第Ⅰ期のジャンディアールB寺、ダルマラージカー北寺、ダルマラージカー大塔寺がこれである。この場合僧坊は一對一列式に細長い。前二寺は方形基壇の主塔をもつ。ダルマラージカー大塔は第Ⅰ期から圓形基壇であったことが他のタキシラの主塔に比較するとくに異なっている。マニキヤーラやジャマール＝ガリの主塔と比較される。ダルマラージカー大塔がマーシャルの推論どおりマウリヤにさかのぼるものであるとすれば、創建時に圓形基壇であった塔はそののちの增廣も當初の圓形プランをかえることなく行われたのである。スワートのブトカラ塔院でもこの事情が證明される。第一形式の伽藍配置は第Ⅰ期に流行した。ただしどのくらいそののち存續したかはつまびらかでない。ただ言えることは、ダルマラージカー北寺やジャンディアールB寺が第Ⅲ期までには廢絶していたことと、ダルマラージカー大塔寺の第一形式伽藍配置における僧坊に第Ⅴ期に階段や壁のつくりつけがおこなわれたということである。だが、第Ⅱ期の僧坊は、すでに第Ⅰ期と同じ僧坊形式で造建されることはなかったから、第Ⅱ期では第一形式伽藍配置は少數勢力としての意味しかもたない。

第二形式：內庭のまわりに四面に僧坊を配し、內庭中央に塔をおく形式である。第Ⅱ期に初現し、ピッパラ寺、チル＝トープD2寺があり、第Ⅵ期にダルマラージカーM6寺がある。そのうち最古の例はピッパラ寺であり、塔は垣壁にかこまれる第

一形式の系統をひいている。チル＝トープD2寺の東部は不明な點が多いが、第二形式とする。塔は垣壁をもたず、第Ⅵ期のダルマラージカーM6寺につながる系統である。

第三形式：垣壁にかこまれた塔院に接して方形僧坊が配される形式である。チル＝トープD1寺とギリC＝D＝E寺がこの例である。前者はD2寺とともに第Ⅱ期でもおそい創建である。第一形式と第二形式との中間形を呈している。第一形式のように垣壁をもつ塔院とその西に接して僧坊があるが、僧坊は第一形式のような一對一列式ではなく、方形僧坊である。ギリC＝D＝E寺はまた第一形式のような塔院を東に僧坊を西におくものではない。この點、チル＝トープD1寺は塔東僧西であるから、ギリがより第一形式から遠ざかっている。

ただギリC＝D＝E寺は塔北僧南であるから、『摩訶僧祇律』卷第三三の「……塔事者。起僧伽藍時。先預度好地。作塔處。塔不得在南。不得在西。應在東。應在北。不得僧地侵佛地。佛地不得侵僧地。……」（『大正新修大藏經』卷二二、四九八頁a段）には合致し、その點でチル＝トープD1寺や第一形式伽藍配置と同類である。ちなみに、この記事に照合する伽藍配置は、タキシラではこの他に、第Ⅰ期のダルマラージカー大塔寺、第Ⅱ期のチル＝トートプB寺、カーラワーン寺、第Ⅴ期のクナーラ寺、ギリA＝B寺、第Ⅵ期のピッパラ寺があり、時期は限定できない。ギリC＝D＝E寺は、チル＝トープD1寺のように塔院垣壁西邊と同じ長さだけ僧坊を接續するのではなく、南北に長く僧坊をつないでいる。第Ⅲ期になるとギリでは垣壁にそって祠堂列を設けることになり、第Ⅱ期のチル＝トープD1寺やカーラワーン寺とともに、第Ⅳ期のジャウリアーンのような塔院を展開するさきがけとなった。

第四形式：塔院と僧院が對面する形式である。塔院は垣壁がなくオープンな性格をもつ。チル＝トープA寺、B寺、C寺など第Ⅱ期創建のチル＝トープのタムラー＝ナーラー河に近い一群がその例である。A、C寺はのちどのくらい存續したかわからない。第Ⅲ期以降の改修はみられないだけである。B寺は第Ⅴ期までは存續したことが確かである。

第五形式：塔院と僧院とが對向せず、塔の正面階段の方向と僧坊の入口の方向が一定していない形式である。第Ⅱ期創建の

カーラワーン寺、第Ⅲ期創建のジャウリアーン寺、カーラワーンH寺、モーラ＝モラードゥ寺、第Ⅴ期のギリA＝B寺、クナーラ寺など例は多い。そのうち、ジャウリアーン、カーラワーンH、モーラ＝モラードゥは塔處は西、僧地は東である。カーラワーン寺だけは創建當初から屋外佛塔、塔廟、祠堂をそなえており、タキシラをはじめ西北インドでは他にこのような例がない。その他はみな創建當初は、大塔だけの簡素な塔處であった。

以上五形式のほかに、バマーラ寺の伽藍配置がある。塔平面形に特色があったことは上記のとおりである。そのうえ、はやい時期に絶えてしまった、塔地を截然と外界と區分する、垣壁が部分的に檢出され、垣壁の一ヶ所、僧地に面する一ヶ所に門のような性格をもつ施設がひらかれた。しかもこの塔院は全體に高いテラス上にある。

タキシラにおいては、僧地の入口ははっきりつけられる場合が通例であるが、塔地の入口を示す例は比較的すくない。ジャウリアーン塔院の場合は祠堂をできるだけ多く塔院につくった場合、最小限度必要な通路としてひらかれている性格のもので、とくに玄關のような一室をつくったものではない。ところがバマーラと同じく第Ⅵ期になると、ダルマラージカー北寺は、もともと大塔寺のレベルより高かったのに、わざわざ門たるべき一室を造ってその兩翼に垣を造り出し、廣大な寺域であることをはっきりうち出した。この點においてバマーラ寺もダルマラージカー北寺も、タキシラにおけるもっとも新しい時期に、前代とはまったくことなった塔院を展開したと解釋する。しかもダルマラージカー北寺では垣がめぐって僧坊に至り、塔院へも僧坊へもいずれに至るのにもこの門口を通過せざるを得ない。

おわりに

タキシラにおける佛寺プランの變遷をひとまずこのようにたどってみると、マーシャルの記錄だけではとうてい考えられなかった各寺院の縱横の關係が明確になったわけである。そればかりか、この變遷にてらしてガンダーラ地方の佛寺を一瞥するならば、少くとも塔院だけに關しては、タキシラのいずれかの形式と合致するものがあり、また僧坊に關しては、合致するも

ののそしいことに氣づくであろう。伽藍配置全體に關して、第I期の形式をとる佛寺がガンダーラには絶無であり、第II期にも合致するものがない。いまここでガンダーラにおける佛寺の配置と綿密な比較を行う用意はないが、ガンダーラの佛寺の大部分がタキシラにおける第III期ないし第IV期以降のプランと關係が深いことを指摘して、後考にゆずることとする。

參考文獻

タキシラに關しては、

Sir John Marshall, *Taxila, An Illustrated Account of Archaeological Excavations carried out at Taxila*, vols. I & III, (Cambridge, 1951); Sir John Marshall, *A Guide to Taxila*, Fourth edition, (Cambridge, 1960); A. Gosh, Taxila (Sirkap) 1944–45, *Ancient India* No. 4, (New Delhi, 1947–48), pp. 41–48; John Marshall, Excavations at Taxila, *Archaeological Survey of India Annual Reqort 1912–13*, pp. 1–52; *1914–15*, pp. 1–41; *1915–16*, pp. 1–38; *1926–27*, pp. 110–119; *1927–28*, pp. 54–67; *1928–29*, pp. 51–66; *1929–30*, pp. 55–97; *1930–34*, pp. 149–176.

ガンダーラに關しては、

Archaeological Survey of India, Report for the Year 1872–73, vol. V, (Calcutta, 1875), *Archaeological Survey of India, Annual Report 1907–8, 1908–09, 1911–12, and 1921–22.* 水野清一編『メスケンダーペキスタンにおける佛教寺院の調査一九六二～一九六七』、京都大學、一九六九。櫃口隆康「タレリ寺院址第二次發掘」（『東方學報』京都第三七册、昭和四一年、四三五頁―四四四頁）。

スワートに關しては、

D. Faccenn, *A Guide to the Excavations in Swat (Pakistan) 1956–1962*, (Roma, 1964); D. Faccenna, *Mingora: Site of Butkara I, Reports of the Campaigns 1956–1958*, (Roma, 1962) pp. 3–169.

伽藍構成については、

H. Sarkar, *Studies in Early Buddhist Architecture of India*, (Delhi, 1966), D. H. Barua, *Viharas in Ancient India, A Survey of Buddhist Monasteries*, (Calcutta, 1969), ; Sukumar Dutt, *Buddhist Monks and Monasteries of India, Their History and their Contribution to Indian Culture*, (London, 1962); H. Deydier, *Contribution à l'étude de l'art du Gandhara*, (Paris, 1950); 高田修「僧院と佛塔―インドにおける伽藍の形成―」（『佛教藝術』六九號、昭和四三年、六三頁―八六頁）。小谷仲男「タフティ・バヒの佛教遺跡―伽藍配置―（圖版解説）」（『佛教藝術』六九號、一〇〇頁―一〇四頁）。熊谷宣夫「西域佛寺の伽藍配置に關して」（『石田博士頌壽記念東洋史論叢』、昭和四〇年、二一九頁―二三八頁）。

一九七三・一〇・八記

本論は昭和四七年度文部省科學研究費による研究成果の一部である。

小野川秀美教授著作目録

○單行本

金史語彙集成三册　京大人文科學研究所　一九六〇年～一九六二年
清末政治思想研究　東洋史研究會　一九六〇年
　右增訂版　みすず書房　一九六九年
孫文・毛澤東（編著）「世界の名著」六四　中央公論社　一九六九年
民報索引二册　京大人文科學研究所　一九七〇年～一九七二年
宮崎滔天全集（編著）四册　平凡社　一九七一年～一九七二年

○論文

汪古部の一解釋　東洋史研究　二ノ四　一九三七年
鐵勒の一考察　東洋史研究　五ノ二　一九四〇年
河曲六州胡の沿革　東亞人文學報　一ノ四　一九四二年
突厥回鶻時代　「支那地理歷史大系」六（白楊社）　一九四三年
突厥碑文譯註　滿蒙史論叢　四　一九四三年
梁漱溟に於ける鄉村建設論の成立　人文科學　二ノ二　一九四八年
オンギン碑文譯註　「羽田博士頌壽記念東洋史論叢」　一九五〇年
○清末洋務派の運動　東洋史研究　一〇ノ六　一九五〇年
○清末變法論の成立　東方學報　京都二〇　一九五一年
○清末の思想と進化論　東方學報　京都二一　一九五二年
○章炳麟の民族思想　東洋史研究一三ノ一・二合册、一三ノ三、一四ノ三　一九五四年・一九五五年
○譚嗣同の變革論　東方學報　京都二七　一九五七年
○康有爲の變法論　「近代中國研究」二　一九五八年
雍正帝と大義覺迷錄　東洋史研究　一六ノ四　一九五八年
何啓・胡禮垣の「新政論議」　「石濱先生古稀記念東洋史學論叢」　一九五八年
○戊戌變法と湖南省　東洋史研究　一七ノ三　一九五八年
章炳麟の「演說錄」　「塚本博士頌壽記念佛教史學論叢」　一九六一年
興中會の起原　立命館文學　二六五號　一九六二年
○劉師培と無政府主義　東方學報　京都三六　一九六四年
Liu Shih-Pé 劉師培 and Anarchism　*Acta Asiatica* 12, 1967
○義和團時期における勤王と革命「ブルジョア革命の比較研究」　筑摩書房　一九六四年
光復會の成立　東方學報　京都四一　一九七〇年
　○は「清末政治思想研究」に所收

平岡武夫教授著作目錄

單行本（＊は油印）

尚書正義定本（共著）東方文化研究所　一九三九年七月～一九四三年三月
顧頡剛　古史辨自序（譯）　創元社　一九四〇年　六月
經書の成立　全國書房　一九四六年　一月
唐代の年號と朔閏＊京大人文古典の校注と索引編集班　一九四九年　六月
唐代の府州郡縣＊　京大人文古典の校注と索引編集班　一九四九年一〇月
全唐文作者索引＊　京大人文古典の校注と索引編集班　一九五〇年　二月
郭沫若　歷史小品（譯）　岩波新書　一九五〇年一二月
經書の傳統　岩波書店　一九五一年　一月
長安と洛陽＊　京大人文古典の校注と索引編集班　一九五一年　三月
唐代の人人＊　京大人文古典の校注と索引編集班　一九五一年　六月
歷代名人年譜目錄＊京大人文古典の校注と索引編集班　一九五一年　九月
顧頡剛　ある歷史家の生い立ち（譯）　岩波新書　一九五三年　九月
唐代の散文作家　唐代研究のしおり　三　京大人文索引編集委員會　一九五四年　六月
唐代の曆　唐代研究のしおり　一　京大人文索引編集委員會　一九五四年　八月
唐代の行政地理　唐代研究のしおり　二　京大人文索引編集委員會　一九五五年　四月
唐代の長安と洛陽〈地圖篇〉　唐代研究のしおり　七　京大人文索引編集委員會　一九五六年　一月
唐代の長安と洛陽〈資料篇〉　唐代研究のしおり　六　京大人文索引編集委員會　一九五六年　六月
唐代の長安と洛陽〈索引篇〉　唐代研究のしおり　五　京大人文索引編集委員會　一九五六年一〇月
李白の作品　唐代研究のしおり　九　京大人文索引編集委員會　一九五八年一〇月
漢字の形と文化　ハーバード燕京・同志社東方文化講座委員會　一九五九年　六月
唐代の詩人　唐代研究のしおり　四　京大人文索引編集委員會　一九六〇年　六月
唐代の散文作品　唐代研究のしおり　一〇　京大人文索引編集委員會　一九六〇年一二月
唐代の詩篇第一册　唐代研究のしおり　一一　京大人文索引編集委員會　一九六四年　三月
唐代の詩篇第二册　唐代研究のしおり　一二　京大人文索引編集委員會　一九六五年　三月
白氏文集卷三・四・六・九・十二・十七　京大人文科學研究所研究報告　一九七一年　三月
白氏文集卷二十一・二十二・二十三・二十四・二十七・二十八・三十一・三十三　京大人文科學研究所研究報告　一九七二年　三月
白氏文集卷三十八・四十一・五十二・五十四・六十五・六十八・七十　京大人文科學研究所研究報告　一九七三年　三月

論文・その他

士昏禮ニ見エタル用鴈ノ古俗　支那學　七ノ五　一九三五年　五月
五帝本紀ノ新研究　支那學　八ノ二　一九三六年　四月
日本〝漢字〟のゆくへ　都新聞　一九三六年　六月
金縢說話と尚書の今文古文　東方學報　京都一〇ノ三　一九三九年一一月
『尚書正義定本』紹介　史林　二五ノ一　一九四〇年　一月
王者の記錄としての龜甲文と銅器銘　東方學報　京都一二ノ一　一九四一年　六月
周初の精神生活　（胡佛譯　中日文化　三ノ八～一〇　一九四三年）
竹册と支那古代の記錄　支那學　一〇特別號　一九四二年　四月
麒　麟　東方學報　京都一三ノ二　一九四三年　六月
尚書を續ける人人　學藝　一ノ四　一九四三年　九月
東方學報　京都一四ノ三　一九四四年　六月

經學概說　「支那文化の特質」　一九四四年七月
秀吉と明史　學海　一ノ三　一九四四年八月
學界展望學術思想史　東方文化研究所「昭和一五・一六年度東洋史研究文獻類目」　一九四五年五月
明末における經書の續成　東方學報　京都一五ノ二　一九四六年一月
豐坊と古書世學（上）　東方學報　京都一五ノ三　一九四六年一一月
郭沫若　始皇帝の臨終（譯）　學海　三ノ八　一九四六年一二月
天下的世界觀と宗教　哲學季刊　四　一九四七年三月
豐坊と古書世學（下）　東方學報　京都一五ノ四　一九四七年六月
東光創刊號卷頭言　東光　一　一九四七年六月
經學頌歌　學園新聞　一九四七年一〇月二〇日
天下的世界觀と近代國家　東光　二　一九四七年一一月
一つの世界　京都新聞　一九四八年一月二二日
韓愈　青木正兒博士還曆記念「中華六十名家言行錄」（弘文堂）　一九四八年二月
桑原武夫氏に答えてシナ學を語る　東光　四　一九四八年四月
昭和一七・一八年の學術思想史學界　東方文化研究所「昭和一七・一八年度東洋史研究文獻類目」　一九四九年三月
天下的世界觀は動かない　世界　四四　一九四九年八月
郭沫若　項羽の自殺（譯）　世界　五五　一九五〇年七月
中國の古典と索引の編纂　讀書春秋　一ノ八　一九五〇年一一月
唐代に關する索引の編纂について　京大人文科學研究所報　二三　一九五一年八月
顧頡剛　「世界歷史事典」七（平凡社）　一九五二年一月
唐の長安城のこと　東洋史研究　一一ノ四　一九五二年二月
書　經　「世界歷史事典」九（平凡社）　一九五二年四月
唐代史料の集成　京大人文科學研究所報　三八　一九五四年一月
唐代史料の集成について　學術月報　七ノ六　一九五四年九月
唐代史料稿（武德元年・長慶元年～四年・大和元年～三年）　東方學報　京都二五～二七・三七～四〇・四二・四四　一九五四年一一月～一九七三年二月
豐坊　「書道全集」一七（平凡社）　一九五六年八月
新版魯迅全集　讀書春秋　八ノ一　一九五七年一月
李白歌詩索引の編集と出版について「唐代研究のしおり」八、李白歌詩索引（京大人文索引編集委員會刊）　一九五七年三月
文選索引序　「唐代研究のしおり」特集、文選索引第一（京大人文索引編集委員會刊）　一九五七年三月
白氏文集の金澤文庫本・林家校本・要文抄本・管見抄本について　「神田博士還曆記念書誌學論集」（神田博士還曆記念會）　一九五七年一一月
孫星衍　「世界大百科事典」一七　一九五七年八月
全唐文　「世界大百科事典」一八　一九五七年九月
佩文韻府　「世界大百科事典」二三（平凡社）　一九五八年四月
隋唐の宗教・思想・文學　「世界史大系」三（誠文堂新光社）　一九五八年一〇月
The T'ang Civilization Reference Series ZINBVN, 3.（京大人文科學研究所）　一九五九年三月
唐長安城の遺跡調査と夏承燾氏の曲江池考　東方學報　京都二九　一九五九年四月
文選索引附錄序　「唐代研究のしおり」特集、文選索引附錄（京大人文索引編集委員會刊）　一九五九年五月
白氏文集と東急本　かがみ　三　一九六〇年一月
士大夫の生活　「世界文化史大系」中國Ⅳ（角川書店）　一九六〇年一月
元河南志　「アジア歷史事典」三（平凡社）　一九六〇年三月
諸橋『大漢和辭典』書評　週間讀書人　三三三　一九六〇年七月一一日
白樂天の詩文と吳郡志　「福井博士頌壽記念東洋思想論集」（福井博士頌壽記念論文集刊行會）　一九六〇年一一月
白樂天の詩と臨安志　「塚本博士頌壽記念佛教史學論集」（塚本博士頌壽記念會）　一九六一年二月

儒林外史　「中國の名著」（勁草書房）　一九六一年一〇月
兩京新記　「アジア歴史事典」九（平凡社）　一九六二年四月
白氏文集の成立　「東方學會創立十五周年記念東方學論集」　一九六二年七月
白居易の家庭環境に關する問題　東方學報　京都三四　一九六四年三月
（王夢鷗譯　政治大學學報　一〇　一九六四年）
四隅番號の方法―漢字の分類について―　三洋化成ニュース　一二二　一九六四年三月
東洋學文獻類目一九六三年版～六七年版序（京大人文科學研究所）　一九六四年三月～一九六九年三月
金澤文庫白氏文集解説　五島美術館　二九　一九六四年四月
白居易とその妻　東方學報　京都三五　一九六四年一一月
東洋學者とドキュメンテーション　學術月報　一七ノ一一　一九六五年二月
（中國關係資料保存會刊「中國關係論説資料集」三ノ二に採錄）
曾　子（譯）　「漢代畫家の研究」（中央公論社）　一九六五年一〇月
諸子百家の役割　「世界古典文學全集」月報一九（筑摩書房）　一九六五年一〇月
白氏文集における刊本と舊鈔本の間　かがみ　一〇　一九六六年三月
（王夢鷗譯　東方雜誌　復刊一　一九六七年）
長慶元年の曆　東方學報　京都三七　一九六六年三月
白居易　「新潮世界文學小辭典」（新潮社）　一九六六年五月
孟子の革命論　「中國古典選」附錄八（朝日新聞社）　一九六六年六月
『隷釋索引』ニ待ツ　内野博士『隷釋索引』推薦パンフレット　一九六六年八月
（極東書店）
放從良―白居易の奴婢解放―　東方學報　京都三八　一九六七年三月
宋拓墨寶二種　大谷學報　四七ノ二　一九六七年一一月
白居易と賦　「吉川博士退休記念中國文學論集」（筑摩書房）　一九六八年三月
小島祐馬先生の著書　東方學報　京都三九　一九六八年三月
東洋學とドキュメンテーション　センター通信　三　一九六九年四月
東洋學の現況と文獻センター活動　國立大學文獻センター編「文獻センターの利用案内」　一九七〇年二月
白居易と寒食・清明　東方學報　京都四一　一九七〇年三月
五世の長者　「青木正兒全集」第七卷月報三（春秋社）　一九七〇年四月
『五經索引』を世界の人々に　「五經索引内容見本」（臨川書店）　一九七〇年一一月
情報と圖書館　靜脩　八ノ一　一九七一年五月
『四書索引』について思う　「四書索引内容見本」（臨川書店）　一九七一年八月
七二年度、圖書館利用案内はしがき　「圖書館利用案内」（京大附屬圖書館）　一九七二年三月
中國古典文化の特質　人文五（京大人文科學研究所）　一九七二年六月
辭令書の習作　人文五（京大人文科學研究所）　一九七二年六月
石刻と文集の間―白居易の會主墓誌銘を讀む―　「中國の言語と文學（鳥居久靖先生華甲記念論集）」　一九七二年一〇月
杜佑致仕制　「鈴木博士古稀記念東洋學論叢」（鈴木博士古稀記念祝賀會）　一九七二年一〇月
白氏文集の釋文　「東方學會創立二十五周年記念東方學論集」　一九七二年一二月
圖書館の建て物　靜脩　九ノ三　一九七三年三月
六朝唐寫本の價値　『敦煌祕籍留眞』推薦（臨川書店）　一九七三年八月
村本文庫藏王校本白氏文集　東方學報　京都四五　一九七三年九月
シナ學四十年　人文（京大人文科學研究所）　一九七三年一〇月

編　集

「支那學」七ノ四～八ノ三　弘文堂　一九三五年～一九三六年
「東光」全九號　弘文堂　一九四七年～一九四九年
「唐代研究のしおり」全一二卷、特集四卷　京大人文科學研究所　一九五四年～一九六五年